

1 町内会の位置

梁川町は、中通り東北端で宮城県に接し、福島市には17kmの距離にある。西南より阿武隈川が町に入り丸森町に流れる。北緯37度36分、東経140度36分、標高45.05m（梁川分庁舎）の位置にある。

町の中央に市街地がつくられ、阿武隈川支流の広瀬川・塩野川・山舟生川流域と山間丘陵地に集落が開けている。河川に沿った平坦部と山間部では果樹や農作物に凍霜害を受けることがある。

塩野川町内は、梁川分庁舎より広瀬大通・国道349号線を2kmほど北に進んだ土地で、中央に349号線が走り、北は阿武隈川に接し、西を流れる塩野川は広瀬川と合流し阿武隈川に注ぐ。川に囲まれ水の恵みを受けながらも、氾濫地帯のひとつで古くから洪水被害に悩まされてきた。特に8.5水害後、対策を強化し堤防も整備され世帯数も増加した。およそ160世帯の中で苗字が80種類以上あるのは、県内外のさまざまな土地から移った人が多いことを表している。

史跡では、大枝城跡・八幡神社・天神社など伊達氏や松前氏ゆかりの史跡が周辺にある。特産品では、もも・りんご・いちご・あんぽ柿等の果樹や野菜のほか、阿武隈の紅葉漬・伊達鶏・ニット製品がある。かつては、養蚕の町・ニットの町でもあったが今はその面影はない。

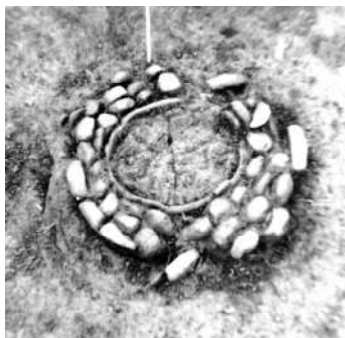


国道349号線にかかる塩野川橋

梁川町の市街地より塩野川町内への入口

2 町谷川に縄文人（原始時代）

梁川町の遺跡は、およそ200箇所あるが、縄文遺跡は60ほどで、大半は中期以降に属する。多くは、阿武隈川や支流の段丘上に分布しているが町谷川遺跡は、阿武隈川・塩野川近くの低地にあり、複式炉が検出されたのも特徴である。複式炉は、暖をとり獣や魚を焼き、木灰でドングリなどの灰汁拔をする。炭火を付属するカメに移し、蒸し焼きにする機能ももつ炉である。この複式炉は福島盆地で最も低い40～45m内外の氾濫原にあり、県内でも最大級の炉と、小さな炉まで含めると4基が確認されている。魚類・木の実が豊富で住み



町谷川遺跡出土炉

カメを利用した珍しい小型炉

易い土地だったからである。時期は縄文中期の遺跡で土器・石器の外に祭祀に用いた土偶も出土している。

はじき すえき
複合遺跡で、古代の土師器や須恵器も発見されているのは、奈良・平安時代の人も居住した土地と推定される。

3 田村麻呂伝説の鬼石観音堂(平安時代)

さかのうえのたむらまろ えぞ
大和政権の命令で坂上田村麻呂が蝦夷征討のため東北地方に遠征し、阿武隈川を渡ろうとした時、敵勢に包囲され、大鬼神に姿を変えた観世音菩薩に助けられた伝説がある。鬼神が姿を消した跡に現れた大石を鬼石、田村麻呂が感謝して建立した観音堂を地元では鬼石観音と呼んでいる。広瀬川河口の鬼石は、洪水で梁川・大枝・五十沢などの境界が動いたときに測定基準点としたり、大水が石を越えたときは渡し舟を出さない目印にする重要な岩だった。残念なことに河川工事で破壊されてしまった。



鬼石が見える絵図 (梁川町史所収)

江戸中期に船問屋が舟の安全運行のため作成した
(福島市所蔵)

4 伊達氏の氏神八幡神社 (鎌倉時代)

ともむね
奥州合戦の功績で中村朝宗が源頼朝から伊達郡を与えられ、本拠を高子館に置き、伊達と苗字を変え、支配したのが鎌倉時代の始まりである。その後伊達氏は13世紀後半、3代義広の頃に梁川に拠点を移し

領地を拡大していった。塩野川地内の東方に鎮座する亀岡八幡神社は伊達氏が梁川城を築いた時期、鬼門の方角に氏神として祀り、手厚く保護した。龍宝寺は別当寺で祈願寺だったが、政宗の領地替えとともに仙台に移っている。



八幡神社の本殿

政宗が戦勝祈願に訪れた

5 塩野川を水源とした開田 (室町時代)

たねむね
室町時代14代植宗が天文元年(1532)に作成した「段銭古帳＝課税台帳」によれば梁川の村々の段銭(田の税)は、「北あらい」5貫150文、「こやな川」2貫725文、「やながわ」700文、「しほの川」5貫100文、(半分は太郎左衛門殿直納)だった。2町歩に1貫の段銭が課せられた説に従えば、塩野川におよそ10町歩強の田があったことになる。当時は1反が360歩なので現面積にすると2割増になる。北新井もほぼ同じ面積で水源は塩野川からの引水であろう。塩野川・北新井・小梁川は、のちに梁川に併合された。

塩野川地内の田に灌水するには堰が必要になるが、古くから作られ、江戸時代の「梁



塩野川から水揚げする堰
観音溜池下流地点（通称上堰）

川村明細帳」には、観音溜池付近から町谷川橋間に「塩野川堰」など3箇所の堰が記されている。なお、段銭の半分を納めた国分氏は、税を直接収納できる特権を棟梁から与えられた重臣で、西大枝の「金谷館」に居住していた村地頭である。

6 鬼石までの漁業権を得た鹿俣氏

弘治2年(1556)植宗は鹿俣^{かのまたい き}壱岐に、広瀬川の川止め、伝樋川^{でんぴがわ}の「落合」より広瀬川の鬼石までの鮭漁の支配権を与えた。

鹿俣一族は田村郷鹿俣の出身で、13代^{ひさむね}尚宗時代に梁川に領地を拝領したと家譜

（梁川・鹿俣正治家蔵）に記している。現在の鹿俣氏の子孫とされるがどこに屋敷があったかは分からないが、梁川の村地頭と思われる。

また、輝宗家臣の大和田氏が元亀3年に、戦功をあげたとして「野田河原」（広瀬川と塩野川の合流付近の畑地）を与えられた判物^{はんもつ}が仙台入間田家で所蔵している。

7 政宗の参拝と愛姫の興受け渡

天正7年(1579)、田村清頭^{きよあき}の娘、愛姫^{めぐひめ}

が政宗と婚姻するため八幡神社境内で興^{こし}受け渡しをする。現在も田の畦道に形を留めている小道をとおり、舟場の渡しで阿武隈川を渡り小坂峠を越え米沢に着き祝言をあげた。愛姫12歳、政宗13歳であった。

天正10年(1582)4月1日の祭礼日に政宗は、父親の輝^{てるむね}宗と八幡宮に参拝し梁川城に2泊し、先祖が治めた城下の春を見聞して帰った。その後も兜や刀など奉納している。



愛姫の興が通った小道

伊達氏の領地は良馬の産地として知られていたが、八幡神社では流鏑馬^{やぶさめ}が行われたり、馬市も開催されていた。近世の資料には4月1・2日と8月15・16日に馬市が開かれていた資料が残っている。

天正19年(1591)奥羽仕置きで政宗が米沢^{かも}を去り、信達地方は蒲生氏、次に上杉氏^{ながよし}の支配となり梁川に2万石で須田長義が城代として入った。慶長5年に発生した関ヶ原合戦で政宗が先祖の領地奪還の好機と梁川方面に侵攻した。長義勢と大枝城跡周辺で合戦を繰り広げ、政宗が敗走したことが上杉氏側の記録に残っている。



大枝城跡（大枝地区）
信達攻略の際、政宗が陣地を置いたという

8 舟場が栄えた江戸時代

寛文4年(1664)に上杉氏の領地削封で幕府領になり、信達地方の年貢米は江戸運送を命じられた。そのため、江戸の豪商渡辺友意が阿武隈川の改修工事を行い、福島から荒浜まで通船できるようになった。



梁川旧河岸場付近（昭和50年代）
鬼石の下部らしい一部が残る

寛文10年、幕府は河村瑞賢かわむらざいけんを起用し、阿武隈川航路の開拓と東回り航路を整備したため年貢米の輸送と商い舟の往来が多くなった。河岸場までの距離が650mの天神社付近に年貢米を保管する寄小屋よせごやがあった。河岸場橋が井上氏領のとき新設されたと伝えるのは天神橋のようである。梁川河岸から、小鵜飼舟こうかいぶねに積んで阿武隈川を下り積み替えを繰り返し江戸に送った。

福島から梁川までの河岸の中で、梁川河岸（八幡）は福島に次いで多量の年貢米を積み出した。商い舟は、上りは塩や魚介類・生活用品、下り船は幕末で桑苗木や太物（綿織物類）・蚕種などで生活を維持する役割を担っていた。舟場は賑わい「伊達の浜」と呼ばれた。年貢米は金納になる明治初年まで断続的に行われ、商舟は東北本線が開通すると縮小されながらも部分的には運行された。



河岸場で用いた
一斗ます 御城米用。
万延元年と刻印
(菊地藤一家蔵)

(1) 江戸時代の村の姿

(享保16年(1731)梁川明細帳より)

◇江戸時代の梁川村の戸数 450軒

塩野川 12軒

北新井 7軒

足駄木 5軒

(3地内は梁川村の郊外扱)

◇村高 3104石4斗8升2合(田畑)

◇年貢高(課税) 約5割5分(米と金子
半分ずつ。凶作などで変動する)

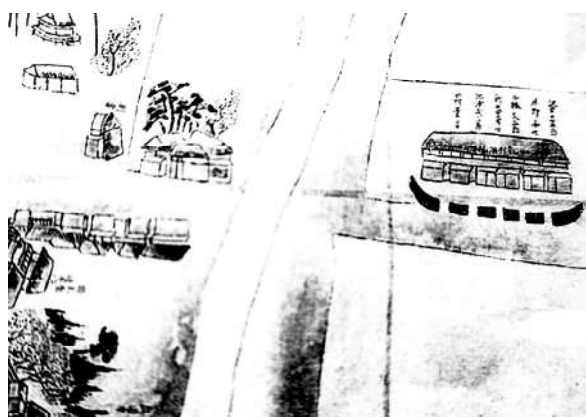
◇梁川の人口 男1164人 女819人
(男性が多い。郊外も含む)

◇江戸時代の市日 4・9のつく日で
月6回(6斎市)

(2) 西塩野川に松前家臣の長屋

文化4年(1807)7月、松前章広まつまえあきひろが幕府より梁川ほか6ヶ村を与える国替えを命じ

られた。北方警備の責任を問われ懲罰的な移封であった。章広は、家臣団6割強を解雇し124名、家族との合計506人を梁川に移した。旧梁川城跡に政庁を建て、家臣屋敷には、桑畑などを買い上げたり、借用して居宅を構えた。土地が十分確保出来ず、郊外の塩野川地内にも6軒分の長屋を建てた。敷地は1反歩で、身分のある料理人などが入居した。



松前氏が西塩野川に建てた長屋

梁川の人々も500人にも突然移住され不安も多かったに違いないが次第に交流も深まり、村には活気が満ちてきたと伝えられている。西塩野川の通称地名に長屋跡を「下長や」と呼ぶ土地があったというのが現在は使用されていない。



塩野川で真綿干しする夫婦
梁川町史所収（市立函館図書館蔵）

なお、松前藩家老であり絵師の蠣崎波響^{かきざきはきよう}が描いた「梁川八景図」の中に、塩野川で真綿干しをする夫婦の絵と舟場風景図があり、函館市の文化財に指定されている。

9 明治からの町内

(1) 旧道となった耕野街道

明治元年1月、鳥羽伏見の戦いで戊辰戦争が始まり、明治2年5月に終結。梁川は福島県として出発した。塩野川地内は大町2丁目から現西塩野川橋をわたり舟場に行く耕野街道^{ぼしん}と呼ばれる道路が主要路であった。街道沿いには氏神の熊野神社（古くは弁財天）が祀られていた。家も道路に沿って建てられ、元舟場5戸・西塩野川11戸・東塩野川1戸（明治9年）で、昭和18年には32戸と増加した。当時の梁川の職業は江戸時代と大きくは変わらず「信達二郡村誌」では、「農桑を業とする400戸、農と商を兼ねる150戸」と記録されているが、塩野川の人々もその中に属していた。ほかに旅館・牛馬商・鍛冶屋などの商人・職人など城下町の特徴ある構成であった。なお「女は養蚕・製糸・綿を業として農事を助ける」と記されている。



旧道の雰囲気が残る西塩野川地内

阿武隈川には、昭和2年に梁川橋（木橋）が初めてかけられたが、それまでは渡し舟が運行されていた。梁川橋は、その後昭和32年に2代目の永久橋が、3代目の新工法の橋が平成20年に完成した。塩野川には、昭和6年に現在の塩野川橋と梁川橋に通じる新道、現在の349号線が完成した。昭和4年度より4年間の計画で始められた耕地整理は塩野川地域では6年度に実施されたようである。現在の旧道の西塩野川橋の下流にも中島橋がかけられていた。また、349号線のバイパスが近く開通するのに合わせ、広瀬川を渡る「新橋」の工事が進められている。



永久橋になった梁川橋
現在は新工法の梁川大橋がかかる



工事中の橋桁
349号バイパスの広瀬川にかかる部分の工事

(2) 悩まされた洪水被害

阿武隈川は「暴れ川」とも言われ何度も流路を変え、室町時代末期には西に大きく

移動したとされるし、江戸時代の寛永14年にも洪水があった。享和2年(1802)の洪水では向川原の水除け土手50間余が決壊し役所に救済を依頼したり、天明・天保の洪水や凶



昭和16年の大洪水
栗野郵便局付近の冠水

作もよく知られている。明治時代以降も被害は続いた。

- | | |
|------|---|
| 明治27 | 広瀬川・町谷川10尺(水かさ)
浸水二丁目29戸、中町2戸、
右城町6戸、炊き出し・救助・
塩野川橋・赤五輪橋落ちる。 |
| 29 | 阿武隈川・広瀬川・町谷川・伝樋
川増水。元舟場9戸床上浸水。 |
| 43 | 阿武隈川17尺・広瀬川13尺、
広瀬橋・塩野川橋流出。
塩野川部落18戸、舟場部落
14戸、188人炊き出し。 |
| 大正2 | 阿武隈川24尺・広瀬川18尺・
塩野川10尺、家屋流失14、
全壊11、埋没23、床上下浸水
457。塩野川橋・町谷川橋流失 |
| 昭和6 | 広瀬川・塩野川増水。塩野川護岸
崩壊66間。 |
| 昭和16 | 阿武隈川増水。向川原堤防決壊。
栗野から南梁川にかけ浸水。 |

(3) 平成の大改修後の世帯増加

阿武隈川の堤防は江戸時代には向川原で築かれたが、ほとんどは昭和になってからで、しかも戦争のため中断し、梁川橋周辺

は昭和24年～33年に築かれた。本格的な堤防は平成の大改修を経てからになる。塩野川なども、昭和6年の記録で「塩野川護岸崩壊」とあるので、工事は部分的に、明治・大正時代から行われたと考えられる。



町内の中心を通る国道
梁川大橋方面より

町内会の古老は、「山に森林のない戦時中は毎年のように大水に悩まされたが、水門を作ってもらえず被害が大きくなった。水門完成まで70年かかった」と30年前に話している。今の塩野川は、大水が堤防を越える一部の場所が残るが、多くの土地は安全になった。

(4) 次世代に伝えたい東日本大震災

平成23年3月11日、大地震に続く津波、予想しなかった原発事故が発生した。
阿武隈川が運んだ ちゅうせきそう 沖積層上にある、栗野や梁川の平坦部の住居は被害にあった。電気・水道が止まり、放射能の影響で農作物の出荷制限、子供たちのマスク姿も目立ち、野外での行事や運動も制限された。支援活動も行われ浜通りなどからの避難者へ炊き出し・避難所での世話など塩野川町内会員も協力した。原発事故の影響は今も続いて

いるが、暮らしを大きく変えたこの災害と事故を次の世代にしっかり伝えていかねばならない。



ガソリンを求める人達
震災直後の3月13日のJA塩野川スタンド

(5) 町内会設立の頃

梁川町全体の人口は、昭和31年の2万6千余人をピークに減少してきたが、他の地方都市と同じように都市部である旧梁川の人口が増加する一方で旧村部は一様に減少している。旧村部から梁川の都市部に移る地域内の都市化現象である。

町内会を設立した昭和42年頃は、イザナギ景気と言われる時期で旧梁川の世帯数や持家数も増え、塩野川町内にも居住者が多くなり町内会設立となったものだろう。借家人も増加し、町営大館西部住宅20戸が建てられたのもこの年である。南町谷川の鉄筋コンクリートの町営住宅が完成するのは昭和54年になる。

現在は、田畑が宅地に変わり会社や工場も進出し、世帯も160を越える集落となったが、豊かな自然が残り塩野川に鮭が遡上したり、堀水を利用し「ほたるの里」作りをするグループもみられる。各地から移った人の多いことも特徴だが、50年前に設立された町内会は役員中心に内容のある活動が進められているのは有り難い。